

26

5

175

さつき—原木
「わかき」とあれ
ど誤なること明
なれば改む

沙汰—訴訟

みちゆかざ—は
かどらず

ほうたん—牡丹
か

豊前の國うだの佐伯と申す人、一族に所領をとられ、京都へ上り沙汰するといへども、更にみちゆかざして、年月をおくれども甲斐なし。かくては叶はじと思ひ、清水にまゐりて、一七日こもりて、御夢想にまかせ、ともかくにもならんと思ひたち、竹松と申す童を一人具してまゐり、祈念を深く申せども、さしたる御夢想もなかりけり。あたりをきつと見てあれば、年のほど二十ばかりの女房の、みめかたち世にすぐれて、翡翠のかんざしは青黛が立板に唐墨をかけたるに異ならず。かつらのまゆすみ青うして、丹花の唇うつくしくして、ほうたんのかさねをに異ならず。三十二相のかたちは、月をねたみ花をそねむむばかりなる女房の、みな水晶の珠数をつまぐり、念誦半と見えけるに、佐伯心におもふやう、おなじ人間にすむならば、かやうの人と一夜の枕を並ぶるよしもがなと、あまり心の堪へかねて、詞をかけんと思ひ立ちより、御こもり候ふかと申せども、

聞かぬ顔にて候ひし程に、もし主ぬしばしあたりあたりに在るやらんと、しづ心もなかりけり。扱
夜もやうく明けければ、けうがる下女に包を持たせ、舞臺をさして出でられける程に、
あまりの名残なごりをしさに、立寄り袂をひかへて、一首かくなん、

別るればわれこそうけれあか月の鳥はなにしに音をば鳴くらん
きて見てぞ宿のつらさも知られける君ゆゑぬる袖とおもへば

かやうによみければ、女房も打案じ、歌の返事せぬものは、舌なきものに生まるととき
けば、ふりかへりてなん、

われも只おなじ心に旅衣きてこそ宿のつらさをも知れ

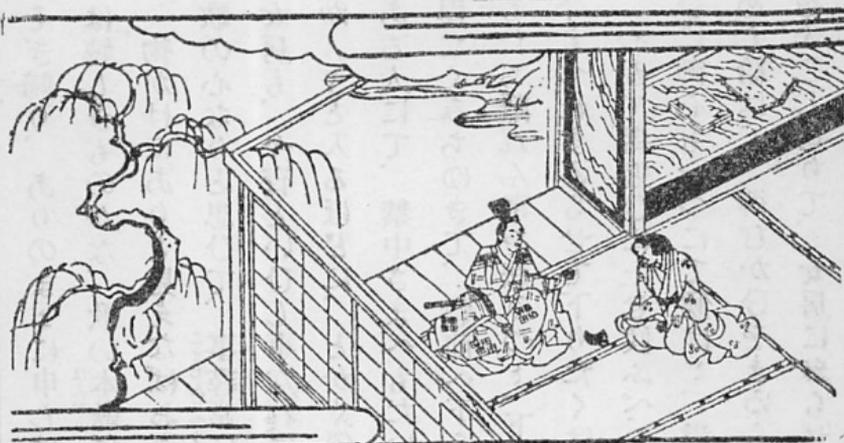
斯様かやうによみ捨てて歸りければ、あまりの名残なごりをしさに、竹松をよびて、今の女房のあと
に行きて、宿を見て歸れよと言ひければ、此童わらわみえがくれに行きければ、四條高倉にて、
さもいなる所へ入りけるほどに、つどきて入りみれば、廣椽ひろえんにうちあがり、妻戸へ入
らせ給ひけるが、うしろを見給へばわらはの來りしを、つくぐと見給ひて、うち笑み
て立たせ給ひける程に、此童わらわさしよりければ、この女房の給ひけるやうは、汝しづが主ぬしには
もすのくさぐきと言へとばかりにて、内へ入らせたまひけり。

いそぎ歸り、ありのまよに申しければ、佐伯聞き給ひて、うち案じつゝ暫くありて、さ
ては嬉しきものかな、歌の本歌ほんかにさる事あり、

物かけにありと見えなばおきなせそこよひすぐすな鴟とびの草莖くさぎ

此歌の心なりと思ひて、事尋常ことじんじやうに出で立ちて、彼の宿所へぞいそがれける。もとより彼
の女房も、今宵といひし事なれば、今やいつやと待ちゐたり。さる程に佐伯、このうちへ
つかくゝと入るほどに、とかくの事もなく、借老同穴のかたらしひ淺からず。此女房は世
にある人にて、禁中さまへもだいゝさんらうかんを參らせ給ひける程に、佐伯の本領
も程なくみちゆきて、豊前へ下らんとぞの給ひて、こしらへられけり。此女房、すこしの
間あひだもたち離れん事を悲みつゝ、下りかねてぞありしが、あるとき此女房に申されけるは、
只今もつれまるらせて下りたくは侍れども、竹松一人候へば、とかくの事にも及び候は
ず、やがて御迎ひに上せ候ふべし、それまで離れがたく思ひまゐらせ候へとの給ひ、た
がひに御心も一つにて候はゞ、道すがらの事もおしはからせ給ひて、御忘れもせずおほ
しめし給はゞ、御むかひをまゐらせんまで、是をかたみに御覽じて御待ち候へと、鬢の
髪をすこし切りて、女房に參らせけり。女房も離れがたく思はれけれどもとばかりの給

さんらうかん
未詳



本望候ふまじ
返事を取りかへ
ることを期待す
る勿れ

ひけり。

かくて筑紫につきければ、安堵の喜びかぎりなし。日々夜々の亂舞、酒盛美々しき事かぎりなし。かくて日數をおくりしかば、三とせになりけれども迎ひものほせず。京の女房は今やいつやと待ちけれども音もせず。そよと風の吹くも此おとれづかと待ちかねて、餘りの苦しさに清水にまゐりて、此いのりをぞ申されける。あるとき鎌倉へ下りける僧のありけるに、文一つかきてことづて、下さんとかたらひければ、此僧やすきほどの御事なりとありければ、うれしく思ひて、ふみをかきて此御僧に奉る。御僧は文うけとりて、行脚の事にて候ふほどに、届け参らせ候はんすれども、御返事までは本望候ふま

じと申し給へば、此文只とどきて候はゞ、よろこび入りまゐらせ候ふべしとて、さめぐと泣き給へば、僧もあはれに思ひ給ひて、いかなる御事の御文にて候ふやらん、いたはしやと思ひて、いそぎゆく程に、程なく豊前の國佐伯の館にたづね入り、此文都より御ことづて候ふとありければ、折ふし佐伯は鷹野に出で、二三日もかへられず。たしかにとどけて、僧はすなはち歸られけり。

内の女房此文をとりて見てあれば、便宜よろこび申しまゐらせ候ふ、さてもく御下りのその後、よもの萩原霜枯れて、たよりの風の音もなし、下葉の露も秋すぎて、おき所なき葛の葉を、うらみんとすれども枯れくの、かつらばかりの身にそひて、しがらむ今の我心、せめて思ひも慰むと、傾く月を見おくれども、ながむる人のあらざれば、空しき夜半のあか月は、したしき寢屋にたちかへり、あくるも遅き戀衣、君が姿を夢にても、せめて見ばやと思へども、ねられぬ夜はの癖として、夢さへうすくなりにつけり、かたく袖のひとりねは、雲居の雁のひとつらも、つがはぬ鴛鴦のことちして、霜さむしろの鶴が音は、あふと見る夜の夢もなし、思ふ心のおもかけは、身にそふばかりますかどみ、見ると申す人もあらばこそ、さながら夢の心地して、空飛ぶ鳥の一つがひ、うはの

空なる事までも、契りと聞けばうらやまし、行きがた知らぬあま小舟こぶね、獨り物をやこがるらん、野寺の鐘の入相も、心つきぬるうき身かなと書きて、あまのみるめもはづかしや、いそぎ煙となし給へとて、おくに歌あり、

見るたびに心つくしのかみなればうさにぞかへすもとの社へ

うさゝ憂き、宇
佐

たのめられて一
たのもしくせら
れて
ちやう一傾城屋
の主人を長とい
ふ事あり、そこ
にある女をいふ
にや
そらやみ一假病

とかよれたり。佐伯くだりの時、かたみとて一ふさ切りて置きつる鬢の髪を、卷きそへてあり。うちの女房是を見て、あらうつくしや、おもしろや、かゝる優いづなる女房を呼ばではいかどあるべきぞ、かほど福人ふくじんなる男に、かくと物いはいかどあるべき、たばかりごとを言ひて見んと思ひて、佐伯鷹野より歸りけるに、女房いふやうは、みづからが妹都に人にたのめられて此程候ひしが、夫つまの心のうたてさは、とあるちやうに思ひつきいとまを出だして候ふ程に、萬事たのみて下り候はんと、文ふみをことづて下し候へば、むかひを上せてたび候へと言ひければ、やすき程の事なりとて、いそぎ迎ひを上すべきといひて、やがて言ひつけて、人を上のほせんとありしかば、その時此女房はそらやみをして、文を書きえず候ふ、殿ひでみに一筆ひとひあそばして御やり候へと言ひければ、ともかくもとて書かれけり。久しく御おとづれも申し候はで、心より外に候ふ處に、御文おんふみ給はりうち置きがた

く、御嬉しくながめ入り候ふ、すなはち御むかひまゐらせ候ふまゝ、急ぎ御下り候べく候。くはしくはとて御みづからにてと書かせたり。さるほどに程なくむかひは京へ上りつきけり。その間にうつくしく御所をたて待たれけり。京には嬉しく思ひて、やがて下られける間、程なく豊前の國につき給へり。御下りとおのくひしめき、やがて新造へ入れ奉りて、女房いであひて、あらいつくしの女房や、李夫人、楊貴妃、衣通姫、小野の小町と聞きつたへしも、是にはいかで勝るべき、われさへ見れば餘りのうつくしさに、たちども更に覺えず、かほど美しき人をさへ言ひ出だす事もなし、ましてわらはが事とは、年月長々の在京に一度も思ひ出だすまじ、かほど無得心なる男を頼みしわれこそ淺ましけれとて、髪剃り落し出家せんと、たゞ一すぢに思ひ定めし女房の、心のうちこそやさしけれ。かくて夫にいふやうば、是迄京のまれ人を呼びくだして候ふうへは、いそぎ御見參候へかしと言ひければ、すなはち新造へぞうつりける。

其あとに女房は髪を切り文にそへおき、やがて家をぞ出でにける。京の女房此由を聞き、やさしやな、高きも賤しきも妬むならひの候ふに、かやうにやさしき人をいかでか一人おくべきぞ、佐伯に二たび見參して、過ぎにし戀をはれつるも、偏に彼の本妻のなさけ

の深きゆゑなれば、共に出家せんとて、やがて髪切り捨てて、同じ庵室あんじつにとち籠り、行ひすましてゐたりけり。

佐伯は二人の女房に捨てられて、あるに甲斐なき身のほどとて、髻もてりきりて西へ投げ、高野山へぞ登りける。是も清水の観音の御方便にて、三人ともに救ひとらせ給ひて、いづれも行ひ澄まして、往生の素懐をとけ、彌陀、観音、誓至とあらはれ、三尊是なりといへり。誠にありがたくたつとかりける恵みなり。